



Title	日本における人形の近代的役割：1920-40年代の国際交流と外交を中心に
Author(s)	ベレジコワ, タチアナ
Citation	間谷論集. 2017, 11, p. 181-210
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89843
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本における人形の近代的役割

－ 1920-40 年代の国際交流と外交を中心に－

ベレジコワ・タチアナ

1. はじめに

明治維新後、国際舞台に立った直後の日本は、文明国の仲間入りを目指し、不平等条約の改正や、日本にとって可能な限り有利な立場となるような国際関係の構築と維持、などの数々の難問と課題に直面していた。こうした諸問題を解決するには、世界各国、特に欧米諸国との関係を巧みに築くことが絶対条件であった。したがって、国内に目を向けながらも、国際舞台において存在感を増すような努力が必要となった。具体的には、貿易の拡大や海外の博覧会や展覧会などの出品を通じて、日本製品や風俗習慣や文化を海外へ伝えるという国外へのアピールと同時に、積極的に西洋の文化を取り入れることによって、文明国の仲間入りをするという国内への西洋文明の取り込みを行っていた。

「国際人形交流」はこうした潮流の延長線上で起こったことである。詳細は本文中で後述するが、日本が参加した「国際人形交流」は、アメリカの提案によって始まったものであり、日本製の人形を送ることによって外国へ日本文化を紹介する好機であったとともに、諸国との関係を築く方法の一つにもなったと思われる。初期には単なるプレゼント交換であった国際人形交流は、回数を重ねるごとに日本において独特の展開を見せた。次第に政治的な要素を強めていき、さらには外交の手段として発展していったのである。具体的な変化は本文中で詳述するが、ここではまず代表例を二つだけ紹介しておこう。

まず、1927年に大きな話題になった「日米親善人形交流」は、人形が単なる物の交換から、外交の手段へと移行する上で、画期となる出来事であった。このときアメリカから贈られた、いわゆる「青い目の人形」は約1万2千体であったのに対し、日本からはそのお礼として58体の「答礼人形」が返送された。こう

した交流は、両国の絆を深めただけでなく、一般庶民も政治家たちを含め、多くの日本人に「文明国」の仲間入りができたという印象を与えたようだ。1927年の「日米親善人形交流」は、両国の子どもの交流でありながらも、政治的要素を少なからず含んだ交流であったのだ。当時大きな話題となったこの国際人形交流は、日本においてさらなる「国際人形交流」と「人形外交」に大きな影響を与え、その発展を促進させる契機となった。

この6年後の1933年に行われた「日満親善人形使節」は、政治的な色彩がより濃くなった行事であった。これは子どもの交流というよりも、むしろ外交の手段として行われたものであった。つまり、その名の通り「交流」ではなく、一方的な「使節」というものであったのである。

以上のことから、1927年の「日米親善人形交流」と1933年の「日満親善人形使節」では、その性格に差異が存在することがわかるだろう。こうした違いがいつ、どのようにして生じたのか、非常に興味深いところである。

そこで本稿では、明治後期の数少ない事例も取りあげながら、大正後期・昭和前期の日本における国際関係の一端を担った国際人形交流と人形外交の展開に注目し、その歴史的流れや各時期の特徴を論じることを目的とする。ただし、本稿では国際人形交流と人形外交に関する年表の作成は目的とせず、あくまでも人形の贈呈をめぐる国際関係が、いかなる要因によって交流から外交に発展したのかを、脚光を浴びた事例を取りあげることによって追究したいと思う。

本稿の構成は次のようなものである。まず、近代日本において人形の贈呈をめぐる国際関係に関する先行研究と一次資料を紹介した後、「人形交流」と「人形外交」の性格の変遷を明らかにする。そのために先に示した1927年の「日米親善人形交流」と1933年の「日満親善人形使節」を境目として、「人形交流」の性格の変遷を「1920年以前」、「1920～26年」、「1928～32年」という三つの時期に区分する。それに続き、その後の「人形外交」の性格の変化を歴史的に概観し、最後にごく少数ではあるが、第二次世界大戦後の人形使節の例も挙げ、全体のまとめをした後に、本稿を閉じたいと思う。

本論に入る前に、本稿で使用する「人形交流」と「人形外交」という二つの用語について説明しておこう。「人形交流」とは、二国間で人形を相互的に贈答す

ることである。これは、人形を贈ってくれた側に対して答礼として人形を贈るという行為である。つまり「交換」による「国際親善」が主目的であり、その点が強調されるのが特徴である。一方、「人形外交」とは、相手国の権力者に向けて人形を贈呈することで「交友関係」を目指す行為をいう。この場合は、「国際関係」の強化や両国の力関係を示すことが主目的となり、相互的でないものが多いというのが特徴である。

では、まず本稿に関する先行研究と一次資料を簡単に紹介しておこう。

2. 先行研究と一次資料

人形交流と人形外交に関する先行研究は、主として1927年の「日米親善人形交流」を中心に行われたものである。これらは、三つに大別できる。

一つは、アメリカの「青い目の人形」と日本の「答礼人形」に注目し、人形から見た「日米親善人形交流」の歴史をたどる研究である。代表的な書物として童話作家の武田英子による『青い目をしたお人形は』が挙げられる。きっかけは1973年に群馬県利根郡東小学校で発見された一体の「青い目の人形」であった。メリーという名を持つ人形の発見によって、「青い目の人形」が注目を浴び、1927年の「日米親善人形交流」が研究対象にされることになった。武田英子は、日本各地に残存している「青い目の人形」と、日本から贈られた「答礼人形」に関する調査を行い、その成果をまとめたのである。1998年には、その後にかかった結果が付与された『人形たちの懸け橋－日米親善人形たちの二十世紀－』という書物が発表された。

このとき各地で発見された人形の一部は、地方の博物館に収められ、博物館の図録が次々と発行された。そのなかでも「横浜人形の家」によって編集された図録『青い目の人形にはじまる人形交流』は、とりわけ記述と画像が豊富で重要な資料となっている。

二つ目は、1927年の交流に携わった人物に関する研究である。たとえば、「日米親善人形交流」の主導者であった親日家でキリスト教牧師のシドニー・ギューリックと、日本資本主義の父とされる渋沢栄一の役割や、日米親善への貢献を論じたものに、大藤啓矩1988、是澤博昭1992、2010などがある。

「日米親善人形交流」の先駆けになったボストン児童博物館の館長・J.M. シャーウッドと、京都仏教児童博物館の設立者・中井玄道の交流をたどる佐藤優香 2001、2010 の研究は、「青い目の人形」の歴史に新側面を加えるものであった。また、1年間にわたって行われた「日米親善人形交流」を通時的に考察したものに、赤崎まき子 1996、加藤昭雄 2009 などの研究がある。

三つ目は「日米親善人形交流」の政治的な役割に注目した研究である。前述したように、「日米親善人形交流」は、贈答と外交の画期となった出来事であった。そのため政治的な側面から論じられることが多い。移民問題との関わりに注目した是澤博昭 2001、国民意識への影響を指摘した是澤博昭 1995、朝鮮半島と関東州における「青い目の人形」の受け入れについて論じた是澤博昭 1990、台湾における受け入れに関する游珮芸 1997 などがある。もちろん、前述の渋沢とギュリックの活動を取り上げた研究でも政治的な面が除かれているわけではない。

なお、1927 年の「日米親善人形交流」以外の事例を取り上げた研究も見られる。これらの研究には、昭和前期における日本女子大学校によって行われていた人形交流の事例を取り上げる増淵宗一 2008、国際文化振興会による東京女子師範学校における日米人形交換の状況を詳述する奥田環 2011、1933 年の「日満親善人形使節」事例の状況を描写する是澤博昭 2010、そしてその他の事例にわずかに触れている横浜人形の家編 1991 などといったものがある。

以上のことから、管見の限りでは、近代日本における人形交流と人形外交に関する先行研究の大半は、1927 年の「日米親善人形交流」を中心としたものであり、それ以外の事例を取り入れたものは少なく、限られた施設による活動、あるいは一部の事例しか取り上げていないものであることがわかる。

しかし、実際には 1927 年以前の日本においても国際人形交流が活発に行われており、1933 年の「日満親善人形使節」のあともそうした活動は続いていた。つまり、人形交流と人形外交は、先行研究で示されているよりずっと長い歴史を持つのだ。本稿では、その軌跡を追うことにより、人形贈呈をめぐる近代日本の国際関係について論じる。

次に、本稿で分析対象とした一次資料を紹介しておこう。中心的な資料になるのは、『朝日新聞』と『読売新聞』の記事である。もちろん、この資料には、長所

と短所がある。それを意識しながら使用しなければならない。まず、短所として、新聞によって読者層や関心が異なるため、すべての事例が掲載されているわけではないという点が挙げられる。つまり、ある程度話題にならないと、載せられないという可能性が高くなるのである。もう一つの短所は、この二つの新聞の内容は東京を中心にしたものであり、地方で行われた交流についての情報は掲載されない可能性が高いということである。これらの短所を考えると、この二つの新聞に載っている情報だけで、その全容を明らかにするのは困難であり、おのずと限界が生じる。ただ、こうした短所は、かえって長所となる可能性もある。全国的に話題になった事例だけが掲載されているのであれば、その事例の話題性のある程度推察することができるからである。本稿では、当時、全国的に注目を浴びた事例のみを取り上げたいので、主要な新聞こそが適切な資料であると考え。

では、これらの資料のこういった点や事例に注目し、収集を行ったのかについて説明したい。注目したのは次にあげる三点である。一つ目は「人形を贈る側」、つまり人形がどこから贈られたのか、具体的にどんな人物が関わったのかという点。二つ目は「受け取る側」、つまり人形がどこに贈られたのか、また具体的に誰のために贈られたのかという点。特に、人形交流と人形外交は、子どもを主役にして行われたのか、大人を主役にして行われたのか、といった点に注目する。三つ目は「贈られるもの」、いわゆる人形の種類とその特徴という点である。

人形を贈る意図に関しては、「国際親善」という目的や意味が読み取れる事例に注目した。ちなみに、これ以外の事例（「慰問」、「慈善活動」、「個人的贈物」など）は本稿の目的から外れるので省くことにする。また、本稿で取り上げる人形交流と人形外交の期間に関しては、1920年代から1940年代までの期間に注目する。なぜなら、1920年以前に注目された事例の数が少ないからである。しかし、1920年以前の時期を完全に無視することはできないので、その性格について後述する。

ちなみに、本稿の引用は、読みやすさを考慮して、句読点を補い、必要な箇所以外はふりがな（ルビ）を省き、二字以上の繰り返し記号に該当する箇所にはそれに相当する文字を当て、そして漢字を通用のものに改めたことをあらかじめ断っておく。

3. 近代日本における国際人形交流

人形の贈呈をめぐる国際関係は、1920年にクリスマス・プレゼント交換、つまり相互的な国際交流の形から始まるのだが、その前に1920年以前に人形がどのように国際関係分野で使われたのか、この点を簡単に説明しておこう。

まず、二つの例を挙げてみよう。一つ目は「団洲露国公使を饗す」(『読売新聞』1896年1月9日朝刊第3面)というものである。これは九代目市川團十郎がロシア公使を自宅に招待し、宴会を催した際に、歌舞伎「暫」の姿をした奈良人形の根付を贈呈したという記事である。

二つ目は「有栖川宮妃殿下の御好人形(外国への御贈品)」という見出しの記事である。この記事には、有栖川宮妃殿下がドイツ皇太子の結婚式で種々の物を贈られた返礼として、日本風俗の美術人形を贈ることになったということが書かれている(『読売新聞』1906年2月1日朝刊第3面)。

以上の二例から、海外の権力者に対して日本側からそのお礼として人形が贈られたことがわかるだろう。その贈答は相互的ではない。さらに、主要な新聞で注目される事例数が少ないことも、この時期の特徴である。

ところで、1920年以降、なぜ「人形」¹が国際交流の場面で使われるようになったのか、またなぜこういった交流が1920年に活発に行われるようになったのか、に関心がそそられる。その直接的な理由を記事から読み取ることはできないが、時代背景などからいくつかの理由が推測できる。

一つ目は、この時期、日本製の人形と玩具の輸出が急速に増大したという理由である。玩具業界の世界輸出額で第一位を占めていたドイツの人形輸出が第一次世界大戦の勃発によって途絶えしてしまう。これによって、日本製の人形と玩具は輸出拡大の好機を得²、またアメリカをはじめとする欧米諸国が日本製品に親近感を持つようになったのである。

1 本稿で扱う「人形」という術語の範囲は明治時代以降の資料において、「人形」と称されたものを対象とする。

2 具体的には、日本玩具輸出総額は、1914年に約259万円、1915年に約453万円、1916年に約764万円、1917年に約840万円、1918年に約1,019万円、1919年に約1,300万円、1920年に約2,118万円(永澤謙三1934, p.85)となっている。

さらに、「玩具が凄まじく米国へ輸出する 昨年四百五十万円 今年五割を増した」(『読売新聞』1916年8月18日朝刊第5面)という見出しの記事からは、この時期のアメリカが華客になり、ドイツに変わって次第に日本製玩具を輸入するようになっていったことが読み取れる。こうした傾向が、日米間で1920年に行われたクリスマス・プレゼント交換を促した要因だったのかもしれない。

二つ目は、子どもの教育において人形の重要な役割が教育者や心理学者によって唱えられるようになったことである。たとえば、アメリカの心理学者スタンリー・ホールは、人形を特に愛する年齢は満2歳から14歳の間³であると主張していた。この考え方が日本にも伝わり紹介された。この影響を受けた教育者で心理学者の高島平三郎は「人形は女子に必要なものである」という記事を掲載し、そのなかで高島は人形が「他人の事を考へて同情する美しい心を養つて女子には最も必要な物である」という(『読売新聞』1910年11月20日朝刊第3面)。また彼は、「人形のはなし」という見出しの記事で、教育上、人形に託された使命について述べている。この内容を見てみよう。

斯くの如く人形は非常に古くから今日まで流行してゐるが、夫が教育上に及ぼす効果は何うであらうかと云ふと、第一に想像力を強くし、第二家事に熟し、第三社会性を養成せしめ、第四趣味を啓発し、第五同情心を高め、第六小児に注意するに至り、第七に其人格を温雅ならしむるなどと云ふ点にある。(『朝日新聞』1910年11月21日朝刊第5面)

以上のことから、明治後期の日本において、人形への期待が大きかったことがわかる。子どもの想像力や社会性、趣味、同情心などを育成し、将来的にはよい親となるためには、教育上ふさわしい人形を子どもの遊びに取り入れるべきだと見なされていたのである。このように、教育上にも有効であり、かつ肯定的なイメージしか持たない人形を、子どもの手による国際交流に利用することは、当然といえば当然の手段であるともいえよう。さらに、人形を持って遊ぶ経験のない

3 『読売新聞』1910年11月20日朝刊第3面。

子どもはこの世にほとんどいない。となると、人形の形や材料、服装が国によって違っていても、どの国のどんな子どもでも他国の人形を手にとって楽しく遊ぶことができるだろう。こうしたことから判断すると、国際人形交流を行った人は、子どもの教育上の効果も考慮しながら交流を行っていたものと推察される。

3.1 1920～26年の間における国際人形交流の始まり

先にも少し触れたように、現在のところ、近代日本における国際人形交流の出発点だと考えられるのはクリスマスにおける人形を含めたプレゼント交換であった。それを示す資料に、「アメリカの子供と日本の子供と クリスマスの贈物を交換 国際的思想を助ける為め」という記事がある。少し引用が長くなるが、重要な内容なので全文を下に示す。

中渋谷の新教会では今年のクリスマスにアメリカと玩具の交換をする筈で、此方からは十一月中に全部送り出して今はもうクリスマスの準備をしながらアメリカからの玩具の到着を待つて居ります。同教会の渡辺敢氏は次の様に語られました。『此の夏日本へ夫人令息を伴つて来朝されたシカゴのエル・ブラツケット・ビショツプ氏から此の計画の話がありましたので大変面白い事に思つてやつてみることにしました。此れは教会としての交換ではなくて教会員や子供達自身の交換です。此方からは五十人の子供と教師達が送りしました。先方からも五十人の子供や教師から来る筈です。そして子供同志それも男子は男子、女子は女子と交換し、年齢も大体揃へることにしました。此れは互に遠く隔つて今迄名前すらきいた事のない人々が将来何処でどうして相会ふか知れない、或は実業方面から或は政治の方面から。とにかくかう云ふ風に時代を同じにしてゆく子供達の国際的な交際は将来のために非常に面白いことだと思ひます。贈り物にはみんな手紙をつけることになつてゐます。贈物は人形や絵や様々な玩具が思ひ思ひに入れられました。向ふからもきつといろいろくと思ひます。向ふからは玩具の外カレンダーとカードと教会の写真とを各々に呉れる筈で、もう目録だけは届いてゐます。クリスマ

すまでには玩具も届く筈です。みんな大喜びで待つてゐるのです。来年は英国や瑞西とも交換したいと思つて居ります』斯云ふ試みは日本で始めての様です。(『読売新聞』1920年12月19日朝刊第4面)

以下はこの交流の特徴をまとめたものである。

まず、この交流は、アメリカ側の牧師の提案によってアメリカと日本の間で行われたもので、クリスマスにちなんだプレゼント交換という形で行われたものであった。この交流は、子どもと教員を中心としたものであるが、子どもの人数と年齢を合わせてプレゼントを選んでいるところから判断すると、この交流は平等的交換行事であるということを強調したかったのかもしれない。さらに、子どもの将来を考え、国際的交際を築く目的で行われたものでもあり、それは今回贈答交換を行った子どもたちが、将来、実業あるいは政治の場で再会した場合、この交流の経験が何かしらの利益になるかもしれないと考えていた可能性もある。

さらに、贈物には、人形だけではなく、様々な子ども用品や子どもたちが自分たちの手で作った作品が入っていた。最後に、この翌年には、イギリスとスイスとも行う予定であると書かれており、これが日本で初めての試みのようだと記されている。

つまり、第2章で示したように、この交流の場合は、両国の子どもを主役したものであり、人形は贈物の一部にすぎなかったことがわかる。人形の相互交流、それも子どもたちが関係する交流はおそらくここに端を発するものだったのだろう。

では、この時期、他にどんな交流があったのだろうか。それを見てみよう。次に示すのは「英国の子供からおもちやのお礼 日本玩具が着いた時に英国の子供は歓声を挙げた」という見出しの記事である。

芝公園協調会館四階の国際連盟協会児童部へ英国アイル・オブ・ワイトの一小学校長アンニー・エム・ベンネットさんから六月一日手紙が届いた。これは二月その小学校から我国の小学児童へ可愛らしい作品を送つて来たから、それに対して直に日本のおもちやや絵本を送つたところ、それが向ふの児童

達に非常に喜ばれたそのお礼である。この手紙を読むと可愛らしい子供の交際が海を越へて遥に手を結び合つて居ることがわかります。(中略) この種の交際は世界的に広い範囲に於ける平和の招来に絶大の貢献をなすものと確信致します。(『読売新聞』1926年6月4日朝刊第7面)

この場合は、イギリスの小学生に贈られた玩具のなかに人形が入っていたかどうか、現在のところ確認できていないが、少なくとも世界の平和に貢献するような出来事であるという意識があったことがうかがえる。さらに、「お礼」という意図がはっきりと書かれていることから、相互的な交流であったこともわかる。また、この場合も相手国は西洋国であり、仲介は「国際連盟協会児童部」であった。実は、この記事と、先に挙げたクリスマス・プレゼント交換の記事は、いずれも「婦人欄」に掲載されたものであった。このことから政治的なニュースとしてではなく、親交の記事として紹介されたことがわかるだろう。

1923年の関東大震災の際に始まった赤十字社少年団の救済活動の際には、玩具や学校用品などがクリスマス・プレゼントとして日本に送られた⁴。これは、国際親善交流というよりは、一方的な救済活動であった。だが、のちに国際人形交流に携わった赤十字社少年団にとっては、人形交流を始める契機となった出来事であったと考えられる。この時、日本側も返礼として、帝国教育会を通じて東京の罹災小学児童の絵と工芸品を送っている⁵、この赤十字社少年団による活動が完全に一方的なものであったとは言いきれない。

1923年以降の3年の間に、赤十字社を通じて行われた子どもの贈物交換が活発化した証拠として、1926年に赤十字社が関税の免除を大蔵省に請願したという事実が挙げられる。「子供の贈物に関税免除の願ひ 盛になつた諸外国との通信交換 赤十字から大蔵省へ」という記事には次のようにある。

4 これについては、「おもちゃとお菓子とを米国の少年諸君から日本少年へ」(『朝日新聞』1923年12月6日朝刊第7面)、「クリスマスに間に合ふやうに日本の子供へ玩具を沢山サンタクロースのお役目はバーネット大佐夫妻」(『朝日新聞』1923年12月13日朝刊第7面) などという記事がある。

5 「アメリカ児童へ」(『読売新聞』1924年9月10日朝刊第7面)。

日本の赤十字社と各国の赤十字社との間に児童の通信交換が行はれ出してから日は浅いが、今では米仏墺白瑞などを始め、交換を申し込んで来る国が逐増の傾向を示してゐる。本年一月から八月末までに米国から送つて来たもののみでも紙挟帳一六六点半紙四三通に達し、日本ではこれに対して一五二点返送した中には小学児童が可愛らしい人形を作つて、婚礼服、訪問服、夜会服などを付けたものや、動植物の標本、自由画及び生活状態等を表してそれにあとげない説明の手紙を付けてある。日本では奈良県治道小学校から米、仏、白、墺に送つた紙挟帳に対しては先方の児童から涙の出るような感謝の手紙が来て居り、既に返礼の作品の送付を約束してよこしたものもある。『読売新聞』1926年10月11日朝刊第2面)

この記事の続きには、チェコスロバキアからも子どもの作品がたくさん送られたということが書かれている。この記事から分かるように、1926年前後、赤十字社を通じての子ども用品と作品の交換が活発に行われた。実際に日本と交流を行った国は、アメリカ、イギリス、フランス、オーストリア、ベルギー、スイス、チェコスロバキアなどであった。さらに、日本側から東京の学校だけではなく、西日本の学校も交流に参加していたことがわかる。

ここで、1920～26年の時期の特徴をまとめておこう。

この期間に、国際人形交流は、クリスマス・プレゼント交換や関東大震災の救済活動から始まり、世界の子どもの交際という形へと徐々に発展していった。そして、交流の相手国は、主に欧米諸国（具体的に、アメリカ、イギリス、フランス、オーストリア、ベルギー、スイス、チェコスロバキアなど）であり、キリスト教会の施設や国際連盟協会児童部、赤十字社を通じて行われていたことも特徴的である。さらに、第2章で示した注目点に関して言えば、「贈る側」と「受け取る側」はいずれも子どもであることから、このイベントがあくまでも「子どもの交流」であったことがわかる。

また、本稿で注目する三点目に関していうと、このときの贈物は人形だけではなく、子どもが使う物品や子どもが制作した作品などが主であり、人形はその一部でしかなかった。

では次に、人形交流にとって画期となった1927年の「日米親善人形交流」について説明したい。

3.2 1927年の「日米親善人形交流」

前述したように、日本の子どもの世界的交際の機会を増やすという意図から始まった国際人形交流は、1927年に大きな画期を迎える。それは、1927年の「日米親善人形交流」であった。第2章でも述べたように、1927年の「日米親善人形交流」に関する先行研究はすでに盛んに行われており、様々な側面から分析がなされている。ここでは、もっとも重要な点だけをまとめておきたい。

1927年の交流においてアメリカ側の主導者になったのは、キリスト教牧師で親日家のグーリック博士であった。彼は20年以上日本に滞在しており、当然、雛祭りについても知っていたはずである。帰国後、アメリカでエスカレートしていた排日運動にショックを受け、どうにかその動きを抑制しようしていた。1926年に日本からボストン児童博物館に送られた雛人形の展示会が彼に感銘を与え、それが1927年の「日米親善人形交流」の動機の一つとなったという⁶。

1926年末に送られたアメリカの人形は、日本では「青い目の人形」という愛称がつけられ、大歓迎された。これらの人形には、ミス・アメリカを初め、各州の代表をする人形があり、各人形にはそれぞれ名前がつけられ、アメリカから遠い日本へ旅するために必要なものが添えられた。たとえば、電車と船の切符、パスポート、夏着、アメリカの子どもからの手紙などが小さなカバンに収められたのである。これらの人形は、1927年の雛祭りの際に、日本に到着し、雛人形とともに、雛壇に飾られたという。

この答礼として日本側からは、合計58体の市松人形⁷がアメリカへ贈られた。同年の11月、クリスマスに間に合うように贈られた「答礼人形」は、アメリカの人形と同じように、切符やパスポート、夏用の着物一式、お茶の道具などが添えられ、日本の子どもからの手紙も送られた。

6 これについては佐藤 2010 を参照。

7 具体的には、各道府県、6大都市、4外地の代表の人形、そして日本全国を代表するミス・ジャパンが贈られた。

一見すると子どもたちだけのために行われたようにも思われるこの交流には、政治的な要素が少なからず含まれていた。それは、国の代表として贈られた人形の歓迎会には政治家や各国の大使が招待されたり、アメリカで行われた贈呈式において在アメリカ合衆国日本大使・松平恆雄が日本の子どもたちの代理として以下のように述べたりしているからである。

国民相互の接触を密にしその諒解をすすめるにはもはや従来の外交使節だけでは不十分になった。国際親善に貢献したリンドバーグ大佐⁸の飛行は勇敢な男性的なものであるに比し人形使節は心に迫る優しい女性的なものである。(『朝日新聞』1927年12月29日夕刊第2面)

つまり、今までの外交使節の力だけでは、国民の相互理解を深めることは、不十分であり、「心に迫る優しい」人形こそが国際親善に大きく貢献できると述べているのだ。さらに、教育局長・タイガート博士は、以下のような演説をしたという。

これらの人形大使は国際親善の使節としてリンドバーグ大佐以上のものだ。何となれば生けるリンドバーグ大佐はあるひは時に外交的失策をやるかも知れぬ、可愛らしい人形大使は決して失言はやらない、又決して本国に召喚されない。(『朝日新聞』1927年12月29日夕刊第2面)

彼は、人間と違って、決して言葉で失敗しない人形の利点を挙げている。

このように、双方ともこの交流を単なる子どもの間の人形交換としてみなしていなかったのがわかる。先行研究において政治面で紹介されているのもそうした理由によるものと思われる。この交流は、悪化する一方の両国関係を改善しようとし、政治的な面から見ると、外交の手段としての役割を見事に果たしたといえ

8 チャールズ・リンドバーグ(1902-1974)は、アメリカ合衆国の飛行士であり、1927年にニューヨークとパリの間を飛び、大西洋単独無着陸飛行に初めて成功した。

る。そして、子どもの交流を中枢としながら、外交の要素を包含していたという特徴は、以降の人形交流に大きな影響を与え、人形交流の展開と人形外交の始まりを促進させたと考えられる。また、この交流のもう一つの大きな特徴としては、人形はこれまでのように「贈られるもの」の一部ではなく、主たる贈物であったということである。つまり、「1920～26年」の時期とは異なり、1927年の交流は、人形を中心としたものであり、文字通りの「国際人形交流」であったのである。

では続いて「日米親善人形交流」が人形交流をどのように促進させていったのか、それを見てみよう。

3.3 1928～32年の間における国際人形交流の展開

1927年以前、主にキリスト教会と赤十字社を通じて行われた人形交流はなお一層活発的に行われるようになり、国内外でも範囲を拡大させた。この拡大を顕著に示す三つの事例を紹介しよう。

一つは、交流に加わる施設数の増加である。たとえば、1928年に「米国教会からお人形 けふ麻布美普教会で歓迎式」と題する記事には、アメリカ・オハイオ州の教会に属する日曜学校の生徒から、東京にある麻布桜田町美普教会の日曜学校の生徒へ人形が贈られた（『読売新聞』1928年1月29日朝刊第3面）という記述がある⁹。1920～26年の間と同じようにキリスト教会の関連施設が人形交流を続けているが、高等女学校も交流に加わる。それを示すのが「はるばる土耳其からたづねて来たお人形重体 印度洋で重い病氣にかかり赤十字社病院で手当中です」という記事である。

一昨年、東京府下渋谷町常盤松高等女学校から赤十字社を通じて土耳其に日本の使節としてお人形を贈った時、その記念として土耳其のお人形を迎へたいとの希望を伝へたのでした。長い船の旅、あつい印度洋の航海で、蠟で出

9 他に、1929年に東京キリスト教女子青年会からチェコスロバキアのキリスト教女子青年会へお礼として日本少年少女の人形一対が贈られた（『朝日新聞』1929年6月25日朝刊第11面）という例もある。

来上つた三人の土耳其のお人形は何れも軀をこわされました。(『読売新聞 (よみうり少年新聞)』1931年10月11日朝刊第1面)

さらに、「おもちゃ祭り 二十六ヶ国へおもちゃ大使 無邪気な国民外交」という見出しの記事では、日本玩具協会から26カ国へ人形を中心に様々な玩具を集めて贈ったという記述が見える。

おもちゃ大使を送る式に移り、日本と親交ある二十六ヶ国の少年少女参列の上、サンタクロースそっくり塚本靖博士が日本の少年少女から各国の少年少女への友情の印としておもちゃ大使を送るメッセージを述べる。おもちゃ大使は純日本風のお人形を中心とし、まはりに沢山のおもちやをならべ(中略)各国へ送られ少年少女を通じて無邪気な国民外交が行はれる。(『読売新聞』1931年5月9日朝刊第7面)¹⁰

つまり、1928～32年の間に、日本玩具協会や常盤松高等女学校などの施設が人形交流に加わったのである。特にクリスマスの期間になると、活発な活動を行っていた。ちなみに、ここに登場する塚本靖は日本の建築家で、工芸などにも造詣が深く、数々の博覧会の審査員を務めたという人物である。

二つ目は、相手国の数の増加というものである。上記の記事で書かれているように「日本と親交ある26ヶ国」という数字がある他、先に示した記事(インド洋で人形が壊れた記事)ではトルコとの交流についても書かれていた¹¹。

また、「平和と親善のために世界各国の少年少女がクリスマスの贈物 かはいいかはいいお人形さん」(『読売新聞 (よみうり少年新聞)』1931年12月6日別

10 ちなみに、おもちゃ大使を送る前に行われた「おもちゃ祭り」の主催者になったのは、塚本靖東大名誉教授、閨屋文部省社会教育局長、巖谷小波、倉橋藤治郎、西澤笛敏、阿部文理大教授(いずれも日本玩具協会の会員であり、三越児童博覧会、「日米親善人形交流」などに携わった人物)であった。

11 他には、「新大統領夫人へ贈り物」(『朝日新聞』1929年3月7日夕刊第2面)では、アメリカ大統領への人形贈呈が、また「お雛様が結ぶ麗しい内鮮融和 朝鮮各道に贈る内裏雛 けふ華かに贈呈式」(『読売新聞』1931年2月2日夕刊第1面)では、朝鮮へ送られた雛人形のことが、さらに「ハンガリーの女先生から日本へ手芸品をどつさり 田中文相宛に珍しい贈物」(『読売新聞』1931年4月18日朝刊第11面)では、ハンガリーから送られた手芸品の中の手作り人形のことが書かれている。

刷第2面)でも報告されているように、「各国」という言葉さえ出てくる。

三つ目は、多くの地方の施設¹²が国際人形交流に参加し、様々な国と交流を行うようになったことである¹³。つまり地方でも国際人形交流の意義が理解され、積極的に交流が図られるようになった。むしろこの頃は、地方の少年赤十字団による人形交流の方が活発化していた時期であったといえよう。

次は、贈られたものであるが、以前は子ども用品や子どもが制作した作品が主であり、人形はその一部でしかなかった。それがこの頃になると、雛人形や市松人形が贈物の重要な一部になった。それは新聞記事でも確認できる¹⁴。記事内に人形が贈られたことや、種類が明示されているのである。

そして、1927年の「日米親善人形交流」以前と同様、その交流は子ども同士の交流であったことがわかる。

ここで、1928～32年の間の特徴をまとめておこう。

この時期に、世界の多くの国々が日本との人形交流に加わった。それまでと同じように、赤十字社が仲介しているケースも多く見られるものの、これ以外の施設や団体もそこに加わってくる。たとえば、日本玩具協会、高等女学校など、キリスト教会や赤十字社と直接関係ない施設も人形交流に加わっている。さらには、地方の機関も参加するようになった。

また、以前と同様に、「贈る側」も「受け取る側」も子どもを主役とし、相互的な形で行われたのもわかる。さらに、これも以前と同様、「贈られたもの」は人形だけではなかったが、「1920～26年」の時期よりも人形が交流において、より重要視されているものと考えられる。これは新聞記事の見出しにおいて、前の時期よりも「人形」を贈呈したことが強調されていたり、記事に付けられた写

12 鳥取市久松少年赤十字団『読売新聞(よみうり少年新聞)』1932年9月25日別刷第3面)、岩手県の煤孫少年赤十字団『読売新聞(よみうり少年新聞)』1931年12月6日別刷第2面)などの例を挙げられるが、多くの場合、仲介になるのは、少年赤十字団である。

13 すでに挙げた記事でも見られる『読売新聞』1931年2月2日夕刊第1面、『朝日新聞』1929年3月7日夕刊第2面、『読売新聞』1931年5月9日朝刊第7面など)。

14 「詩の様なお手紙を携へ お人形の親善旅行 日本からアメリカ、フランス其他へ」『読売新聞(よみうり少年新聞)』1932年9月25日別刷第3面)、「平和と親善のために世界各国の少年少女がクリスマススの贈物 かはいいかはいいいお人形さん」『読売新聞(よみうり少年新聞)』1931年12月6日別刷第2面)、「おもちゃ祭り 二十六ヶ国へおもちゃ大使 無邪気な国民外交」『読売新聞』1931年5月9日朝刊第7面)などの記事の内容と掲載されている写真を参照。

真では人形が中央に置かれ、クローズアップされていたりしていることから、そのことが推測できるのである。

最後に1920～32年における国際人形交流の流れについて述べておこう。明治後期・大正前期、人形は単なる「個人的な贈物」か、あるいは権力者への一方的な贈呈として贈られており、「交流」という要素を強く持つものではなかった。その時期の人形の贈呈は、政治的要素を含んでいたが、子どもを主役にはしていなかったし、どこまで国際親善や国際平和を目的にしたものだったのかは、正直よくわからない。しかし、1920～26年における国際人形交流の規模は徐々に拡大していった。1927年の「日米親善人形交流」から刺激を受け、国際人形交流が一気に広がった。その規模は、国内でも国外でも広がり、参加する施設の類も増えてきた。赤十字社少年団とキリスト教学校の以外には、日本玩具協会や高等女学校などが人形交流を活発に行うようになった。こういった人形交流の展開は、1933年の「日満親善人形使節」を皮切りに、徐々に政治的な色彩を増すことになる。したがってこれ以降の時期を「人形外交」の期間とする。

ではその様相を第4章で見てみよう。

4. 近代日本における人形外交

4.1 1933年の「日満親善人形使節」

1933年の「日満親善人形使節」は、これまでの事例と違って、政治的要素を格段に増した出来事であった。前述したように、1927年の「日米親善人形交流」と違って、「交流」ではなく「使節」という形で行われたからである。

まず、この使節は、一体どのようなものだったのかイメージをつかむために、その様子を紹介する記事の一部を挙げておこう。

建国一周年のお祝として日満婦人協会から満州国へ贈られる美しいお人形は漸く出来上つて二十四日人形研究会長浅草茅町の山田徳兵衛氏方へ持込んだ。その数八十この中から六十余りが選ばれるのだが、人形はすべて高さ二尺二寸、やまと人形研究会員（東京一流の人形師）が各人が人形一人づつを腕によりをかけて作りあげた。（中略）胸には鳩山文相の書いた『共存共栄』

の文字（木版刷）をはりつけてある。それに東京の各女学校の生徒が一校が人形一つづつに美しい振袖を着せる事になつてゐる。そして五月末か六月始めに生きた美しいお嬢さんの人形使節が連れて満州国へ渡り、溥儀執政、同夫人を始め、建国の功労者、満州国人経営の各女学校に贈られるが、人形使節を連れて行く本当のお嬢さんは団長は松平明子さんで、副団長は東京市内の小学校の生徒から二人選ばれるが、うち一人は日本橋の十思小学校から出る事に内定目下人選中である。（『朝日新聞』1933年4月25日朝刊第11面）

この使節の特徴は次のようにまとめることができる。

この使節は、満州国建国一周年の記念行事¹⁵として、日満中央協会付属日満婦人協会によって派遣されたものであり、少女4名を中心に行われたものであった¹⁶。そして、「受け取る側」は、溥儀執政と同夫人を始めとする、建国の功労者たちや満州国人経営の各女学校の予定であった。贈られる人形は、やまと人形（市松人形）60体、66センチ位の高さのものであり、各人形には「共存共栄」という文字が書かれていた。各人形の着物は、東京の女学校の生徒が縫ったものであった。

ここからこの人形派遣は日本側からの一方的なものであったことがわかる。さらに、少女たち（4名）が溥儀と謁見したときの写真が残っているが、満州側でこの写真に写っているのは、溥儀をはじめとする大人の権力者だけである。

また最終的に人形が満州の女学校に贈られたかどうかはまったくわからない。ただ、使節団は満州に渡り、溥儀に謁見し、國務總理鄭孝胥をはじめとする大巨級の人々に人形を贈呈した後、衛戍病院（陸軍病院）を慰問し、満州を巡回したという（是澤2010、pp.208-209）。

上記のことからわかるように、1933年の「日満親善人形使節」は、両国の子どもの交流というよりは、権力者を対象にして行われたものであり、外交の手段

15 満州国は、1932年3月1日に建国されたが、使節団はその3ヶ月後、つまり6月1日に新京（満洲国の首都）に着き（『読売新聞』1933年6月2日夕刊第2面）、6月14日に帰京する（『朝日新聞』1933年6月14日夕刊第2面）。

16 結果的に、正使1名、副使2名、女学校代表1名を中心に、松平俊子を団長にして、総勢17名で満州へ渡ったという（是澤2010、p.203）。

として行われていたが、1927年の「日米親善人形交流」と同様に、人形が主な贈物であった。

このように国際人形交流は、徐々に政治色を増していき、この「日満親善人形使節」以降、海外へ人形を贈る行為は、子どもを主役にした国際交流の形というよりは、大人の権力者を相手にした外交手段として行われるようになる。

次の節では、1934年以降の人形外交の展開について述べる。

4.2 1934～41年の間の人形外交

まず、満州国に対する人形贈呈は、1933年の「使節」ではなかった。「日満親善人形使節」の1年後、1934年2月に満州帝国皇后陛下の即位、また満州国建国の二周年の記念にあたり、日満帝国婦人協会（日満婦人協会の改名）から、支那人形が贈呈された（『読売新聞』1934年2月18日夕刊第2面）。これについて日満帝国婦人会長・松平俊子（前年の使節団長）は「日満親善は女性の手で」という記事で次のように述べている。

建国の初めより堅き契を結びました我が国は、とこまでもこの国の確立のため、文化発展のためにつくさねばならないのでございます。この共同工作は、ただに国家経営の任にある男性の手に於てのみ成功すると期待することは出来ません。平和の協力は、婦人の手によつてのみよくその目的を達せられるのでございますから（中略）親善は両国女性の手より！（中略）さういふことの一機関として、かねて人形贈呈の挙によつて両国親善のために奉仕いたしました。日満婦人協会はこの度日満帝国婦人会と改名して、その趣旨の貫徹に邁進しようとして居ります。（『読売新聞』1934年3月1日朝刊第9面）

上記のことから、そのときの満州国に対する日本の人形外交には、日満婦人協会が果たした役割が大きいということがわかる。

1934年以降の他の事例を見てみよう。まず、1935年の「米国使節人形夫婦」という出来事が、当時注目された事例であった。これを紹介している「太平洋越

えて青い眼人形使節「可愛い日米親善」という見出しの記事を見てみよう。

アメリカ生れの可愛いお人形が日米親善のため太平洋を越えてはるばる日本を訪問する—この人形使節の贈り主はニューヨーク市長 F・H・ラガーディア氏で、このほど国務省の正式諒解を得て実現するにいたつたもの、男女二名の人形使節は二十八日正午ニューヨーク市庁で正式に伝達式が行われ六月五日市長のメツセージを携へてサンフランシスコ発、同月十九日横浜着の浅間丸で来朝する予定である。

鉄道省国際観光局では日本滞在一週間中に出来るだけ多くの都市を訪問させようとツーリストビューローに旅程作成を命ずる一方、親善の真をあげるため(中略)各都市に歓迎会を開催、第二国民に大いに日米親善を理解させるやう協調することとなつた。(『読売新聞』1935年5月29日朝刊第7面)

次は、上記の記事を含めて、この「使節」に対する情報を以下のようにまとめる。

人形は、男女一対、等身大の人形で、それぞれミスター・アメリカとミセス・アメリカと名付けられていた。これらの人形は、ニューヨーク市長フィオレロ・ラガーディアから派遣されたものであり、日本に対して贈呈されたものではなく、観光客として送り出されたものであった。これに対し「受け取る側」は、当時の東京市長・牛塚虎太郎であった(『読売新聞』1935年5月30日夕刊第2面)。つまり、この派遣は、政治家を主役にしたものであったのだ。

さらに、使節の目的は、日本で一週間滞在し、国際観光局の支援で、多くの都市を訪問し、アメリカの善意を日本国民(子どもを含めて)に理解させることであった(『読売新聞』1935年5月30日夕刊第2面)¹⁷。ここから、少なくとも日本側が、子どもを意識していたことがわかる。しかし、人形の歓迎会には子どもは出席せず、人形画家の西澤笛哉など、人形同好者の山本悌次郎夫人や中橋徳五

17 実際に訪問したのは、六大都市のほかに別府、熊本、長崎の三都市を含めた合計9都市であった(『読売新聞』1935年6月1日夕刊第2面)。

郎未亡人などの名流の夫人たち、大使などが出席していた（『読売新聞』1935年6月9日朝刊第7面）。日本側では、米国使節人形夫婦を迎えるために、日本代表として子どもの姿をした二体の人形・富士夫、桜子が作られた（『読売新聞』1935年6月20日朝刊第7面）。

そして、東京に着いた米国使節人形夫婦は、明治神宮を訪問し、東京市長、各大使館や新聞社にも挨拶し、ショッピングや歓迎会を楽しんだ（『読売新聞』1935年6月21日夕刊第2面）。東京を出発した人形夫婦は、名古屋や京都、大阪、神戸などの大都市を観光して、帰国した。

同年7月には、「答礼使“ニツポン兄妹”」¹⁸が、世界教育資料展で出品を兼ねて、アメリカへと向かっている（『読売新聞』1935年7月20日夕刊第2面）¹⁹。

また同年9月には、米国使節人形夫婦の影響を受けて、日本からパリへ東京人形研究会作の等身大の着物姿人形が派遣された²⁰（『読売新聞』1935年9月5日夕刊第2面）。これらの人形がフランス各地を旅行したあと、パリ人形博物館に納められたという（『読売新聞』1936年3月11日朝刊第7面）。

以上のように、1935年に、人形派遣という形の出来事がいくつも行われたのがわかる。このときの人形は、生きた大使のように異国へと派遣され、親善の役割を果たそうとしていた。

しかし、子どもの間の交流は完全になくなったわけではない。1936年4月に国際文化振興会の援助で東京女高師付属小学校からニューヨークのルーズベルト小学校へ82センチ位の高さの男女一対のものと、42センチ位の高さの男女一対のものが贈られ、また向こうから人形使節が来る予定であるという事例がある（『読売新聞』1936年4月25日夕刊第2面）。

以上のことからわかるように、1930年代後半の人形の贈呈をめぐる国際関係

18 『読売新聞』1935年7月24日夕刊第2面。

19 答礼にアメリカへ出かけたのは「小学児童人形」花子と太郎であった。贈り主は国際女子親善協会。9月4日から米国のインディアナ州で開かれる教育展覧会に向けて7月29日に出発したようだ（『読売新聞』1935年7月20日夕刊第2面）。

20 着物は東京女学校連盟によって作られ、白木屋、三越から寄贈された五月人形、武者人形各一組、郷土玩具を共に連れていくことになった（『読売新聞』1935年9月5日夕刊第2面、『読売新聞』1935年9月18日朝刊第7面）。

には、二つの流れが見られる。一つは、従来の子どもの間の国際交流と、もう一つは、外交の手段として行われた人形使節（派遣）というものであった。後者の流れは、1936年11月25日にベルリンで調印された「日独防共協定」のあとさらに強まった。1937年以降、ヒトラー総統、ドイツ大使館、ムッソリーニ首相などへ数々の人形が贈呈された。「友邦盟主に贈るやまと人形 二千万婦人の祝意伝へて」という記事には次のようにある。

大日本連合女子青年団、大日本連合婦人会は日独伊三国防共協定成立を記念しこの祝賀としてはるかにムッソリーニ首相とヒトラー総統の両友邦の巨人に全国二千万団員の誠意を表現する純日本風俗の“やまと人形”を贈ることになり。（『読売新聞』1938年1月29日夕刊第2面）²¹

これ以外にも、1936年末にフィンランドへ贈られた人形使節「大和桜子」のお礼として、1938年1月にフィンランドから日本へ人形が贈られた（『読売新聞』1938年1月9日夕刊第2面）事例や、ブルガリアの子どもへ「振袖姿の人形使節」（『読売新聞』1939年1月31日朝刊第7面）、オーストラリアへ「南海越えて童心外交」（『読売新聞』1939年4月6日夕刊第2面）、ベルギーへ「日・白結ぶ“日本人形”」（『読売新聞』1939年8月17日夕刊第2面）などの事例がある。

そして、第二次世界大戦勃発後も、中国大使²²、タイ国大使夫人²³、満州国婦人団²⁴などへ人形を贈呈した事例も見られる。各事例の意図はさまざまであるが、この時期の人形には「日本的なもの」ということを前面に押し出そうとする意図が共通して看取できる。

21 これ以外に、「ヒトラー総統への人形使節『万龍』と『暫』けみ贈呈式」（『読売新聞』1937年5月15日夕刊第3面）、「防共の友邦へ贈る人形 少女の手で美しく完成」（『読売新聞』1938年1月23日朝刊第7面）、「防共感謝の会 功労者を招きお人形を贈る」（『読売新聞』1938年2月18日夕刊第2面）、「オット独大使へ親善お人形の贈物 就任を祝してけみ」（『読売新聞』1938年4月29日夕刊第2面）などがある。

22 「樺大使へ親善人形」（『読売新聞』1941年2月19日夕刊第2面）。

23 「セナ前大使夫人に人形を贈る」（『読売新聞』1942年1月11日夕刊第2面）。

24 「満州国婦人団へお人形」（『読売新聞』1943年3月17日夕刊第2面）。

以上のことから、1930年代後半の人形の贈呈をめぐる国際関係には、二つの形態があったことがわかる。一つは、子どもを主役とし、子どもの手によって行われた国際人形交流である。もう一つは、権力者を主役とした外交の手段としての人形使節（派遣）である。ただし、いずれの場合も、「贈られるもの」のなかで、「人形」が主要な位置を占めていた点は共通している。

最後に少数ではあるが、第二次世界大戦後の実例を紹介しておこう。

4.3 第二次世界大戦後の人形使節

この時期になると、敗戦の影響もあり、人形使節の数も急減する。現在のところ、1940年代後半の人形の贈呈をめぐる国際関係の事例としては、下に示す二つの記事のみが確認できているといった状態である。一つは、終戦間もなく、「米国へ一万五千の平和使節」が日本から贈られている。

“青イ目ヲシタオ人形ハ”の歌の国アメリカの兵隊さんは着物姿の日本のお人形が大好き、関東の名産地埼玉県鴻巣町では人形作りの名師関口吉国さんが県内十一支部に呼び掛けて今月末までに一万五千個のお土産人形を製作する。舞踊人形を始め雛人形、武者人形（中略）日本人形が平和を愛好の象徴としてアメリカ兵にお目見得する日も近い。（『読売新聞』1945年9月21日朝刊第2面）

この「平和使節」は、一般国民である人形師の計画であったが、その規模にはただただ驚くばかりである。ここではさまざまな日本人形が「平和愛好の象徴」として用いられている。

そして、二つ目は、4年後、「アメリカへ渡る人形使節」という見出しの記事であるが、そこには次のような文言がある。

アメリカへ感謝使節として日本人形が近く海を渡りますー新しい日本建設のためにアメリカの尽した数々の好意を感謝するしるしに、国際子女親善協会と本社の共同主催で美しい日本人形をトルーマン大統領夫人やマツカーサー

元師夫人をはじめワシントン以下の各都市の市長夫人に贈ることになり、いま製作を急いでいます。(『読売新聞』1949年4月15日朝刊第4面)

この記事では、アメリカの政治家の夫人あてに人形を贈呈する企画について述べられている。目的は、アメリカの「数々の好意を感謝」するのであり、また人形を贈るのは、「国際女子親善協会」であった。日本が戦後、「平和新国家・日本」を作ろうとする意志を、人形を用いてアメリカにアピールしようとしていたことがわかる。

以上から、人形の贈呈を通じた国際関係は、1920～26年を黎明期とし、1927年から第二次世界大戦勃発までの間に全盛期を迎え、終戦直後に落日を迎えたといっていいただろう。

しかし、人形をめぐる交流は、これで完全に幕を閉じたわけではない。第2章で述べたように、1973年に群馬県利根郡東小学校でメリーという「青い目の人形」が発見され、それをきっかけに「青い目の人形」が再び注目を浴びた。そして、1927年の「日米親善人形交流」が研究対象になるとともに、「日米親善人形交流」の主導者になったシドニー・ギューリックの孫、シドニー・ギューリック三世によって、「新青い目の人形」が日本に贈られたのである²⁵。

5. おわりに

最後に、本稿の内容をまとめたい。

本稿では、人形の贈呈をめぐる国際関係の歴史を「人形交流」期と、「人形外交」期という二つに大別した。そして、それぞれの特徴と変遷をより明確にするために、さらに細かい区分を行った。「人形交流」の場合は、1920年以前、1920～26年、1927年、1928～32年間という4期に区分した。そのなかで1927年は、「人形交流」の性格がもっとも大きく変化した年であったので、これを境目の一つにした。

25 「新青い目の人形」とギューリック三世の活動に関して、中之条町歴史民俗資料館編集2007、大藤啓矩1988などの資料がある。

他方、「人形外交」の場合は、1933 年を「人形外交」への変化の境目とし、1934～41 年における「人形外交」の特徴と変化について述べた。最後に第二次世界大戦後の人形使節の二つの例を取り上げ、その性格を明らかにした。

さらには、人形の贈呈をめぐる国際関係史において、人形を贈呈する「意図」や「目的」がどのように変わっていったのかについても明らかにした。1920 年以前には、人形の贈呈は権力者への単なる個人レベルのものであった。それがやがて世界平和を望む子どもたちの国際的な交際を増やすチャンスへと変化し、さらには世界各国との「国際親善」や、日本文化をアピールする手段として用いられ、交友関係を持っている国との外交の手段として使われたりするようになっていった。

1920 年から 1933 年の間、子どもたちは「国際人形交流」において大きな役割を果たしていた。だが子どもその後は徐々に主役は大人たちへと変わって行った。最初期には贈物のなかの一つでしかなかった人形は、1927 年から主な贈物になり、このときから、「交流」でも「外交」でも人形を中心にして行われるようになった。この時期の人形は、日本特有で伝統的な雛人形、または市松人形であり、海外に日本文化を伝える手段でもあった。

最後は、今後の課題について述べておきたい。

本稿で明確にしたのは、人形交流史や人形外交史のもっとも概要に過ぎない。今回分析対象とした『朝日新聞』や『読売新聞』で掲載されたもの以外にも、多数の事例があっただろう。また各行事、1927 以降の使節団において中心的な役割を果たした人物や人間関係に関してもまだ明らかになっていない部分が多い。

今回は、あえて「当時話題になったもの」だけに限定したが、より広範で詳細な資料分析と考察によって、近代日本において人形が果たした役割をより詳述したいと思う。

参考文献

- 赤崎まき子 (1996) 『人形たちの愛は海をこえてーよみがえる青い目の人形と答礼人形ー』
エイ・ワークス
- 安達覚 (2010) 「愛知県に現存する『青い目の人形』の歩んだ道」『人形玩具研究』第21号、日本人形玩具学会事務局、pp.57-64
- 有吉国子 (1979) 「青い目の人形使節」『幼児の教育』第78巻第3号、日本幼稚園協会、pp.34-35
- 大藤啓矩 (1988) 『ギュリック家の人々と日本ー青い目の人形のきずなー』外人墓地を愛する会
- 江橋崇 (1993) 「『青い目の人形交流』講演について」『人形玩具研究：かたち・あそび：日本人形玩具学会会誌』第3号、日本人形玩具学会事務局、pp.2-4
- 奥田環 (2011) 「東京女子高等師範学校における日米人形交換（二）ー国際文化振興会による人形の交流ー」『人形玩具研究：かたち・あそび：日本人形玩具学会会誌』第22号、日本人形玩具学会事務局、pp.28-38
- 加藤昭雄 (2009) 『岩手に残る青い目の人形』熊谷印刷出版部
- 菊池昭男 (1994) 『青い目の人形ーアメリカー秋田友好親善記ー』秋田魁新報社
- 是澤博昭 (1990) 「人形史に影をおとした青い目の人形」『The あんていーく』第8号、読売新聞社、pp.104-107
- 是澤博昭 (1990) 「青い目の人形ー朝鮮半島、関東州を中心としてー」『人形玩具研究：かたち・あそび：日本人形玩具学会会誌』第1号、日本人形玩具学会事務局、pp.88-92
- 是澤博昭 (1992) 「『青い目の人形交流』誕生の背景とその波紋ー日米関係改善に向けての一つの試み或は渋沢栄一、L. ギュリックの見た夢ー」『渋沢研究』第5号、渋沢資料館、pp.3-22
- 是澤博昭 (1993) 「渋沢栄一ー国民外交の行方ー日本における「世界児童親善会」への認識とその後の展開ー」『渋沢研究』第6号、渋沢資料館、pp.41-61
- 是澤博昭 (1995) 「一九二七年日米人形交流にみられる国民意識ー『一等国』日本のコンプレックス」『渋沢研究』第8号、渋沢資料館、pp.3-24
- 是澤博昭 (2001) 「在米日本人移民からみられた日米人形交流ー移民法改正運動から国際文化交流へー」『渋沢研究』第14号、渋沢資料館、pp.3-26

- 是澤博昭 (2010)『青い目の人形と近代日本ー渋沢栄一と L. ギューリックの夢の行方ー』
世織書房
- 埼玉県平和資料館 (1998)『青い目の人形と渋沢栄一ー開館 5 周年記念特別企画展ー』埼玉
県平和資料館
- 佐藤優香 (2001)『J.M. シャーウッドと中井玄道による日米親善人形交換事業ー日本にお
ける『子どものための博物館』設立の契機ー』『教育学論集』第 19 号、甲南女子大学
大学院文学研究科教育学専攻、pp.23-41
- 佐藤優香 (2010)『日本における子ども博物館のはじまりーチルドレンズ・ミュージアムを
媒介にして国際交流ー』『博物館雑誌』第 36 巻第 1 号、全日本博物館学会、pp.29-50
- 高岡美知子 (2004)『人形大使ーもうひとつの日米現代史ー』日経 BP 社
- 高屋豪瑩、成田マツエ (1999)『弘前学院の友情人形 (俗に青い目の人形) を追跡して』
『弘前大学國史研究』第 106 号、弘前大学國史研究会、pp.71-83
- 武田英子 (1981)『青い目をしたお人形は』太平出版社
- 武田英子 (1998)『人形たちの懸け橋ー日米親善人形たちの二十世紀ー』小学館文庫
- 土浦市立博物館編 (1995)『青い目の人形ー戦争と平和の証言者ー第 16 回企画展ー』土浦
市立博物館
- 中之条町歴史民俗資料館編集 (2007)『青い目の人形ー友情人形来日 80 周年記念展ー』企
画展図録、第 6 集、中之条町歴史民俗資料館
- 長崎歴史文化博物館編 (2007)『青い目の人形と長崎瓊子展ーあれから 80 年、きずな未来
へーもうひとつの日米交流史ー』長崎歴史文化博物館
- 永澤謙三 (1934)『玩具工業編』雄山閣
- 岐阜県歴史教育者協議会編 (1995)『『青い目の人形』と答礼人形「ミス岐阜」ー人形が携
えた友好のメッセージ「ミス岐 (答礼人形)」ー』里帰り実行委員会
- 古川章 (2015)『青い目の人形のこと』『青淵』第 797 巻、渋沢栄一記念財団、pp.23-25
- マール社編 (1988)『青い目の人形交流展ーお帰りのさい答礼人形ー』国際文化協会、朝日
新聞社、そごう美術館
- 増淵宗一 (1985)『青い目の人形研究 (一)ーギューリック博士と成瀬仁蔵ー』『日本女子大
学紀要、文学部』第 35 号、日本女子大学文学部、pp.45-58
- 増淵宗一 (2008)『青い目の人形と日本女子大学校』『人形玩具研究:かたち・あそび:日

本人形玩具学会会誌』第 19 号、日本人形玩具学会事務局、pp.33-46

八戸市博物館編（1999）『青い目の人形』八戸市博物館

山梨県立博物館編集（2009）『山梨にやってきた「青い目の人形」たち』山梨県立博物館

游珮芸（1997）『『青い目の人形』の渡台－日本植民地台湾で繰り広げられた『国際児童親善』の虚実－』『人形玩具研究：かたち・あそび：日本人形玩具学会会誌』第 8 号、日本人形玩具学会事務局、pp.99-109

横浜人形の家編（1991）『青い目の人形にはじまる人形交流』横浜国際観光協会横浜人形の家

Sidney L.Gulick 3d. *Friendship between Japan and America Through Dolls*. 『人形玩具研究：かたち・あそび：日本人形玩具学会会誌』第 3 号、日本人形玩具学会事務局、pp.5-13

〈キーワード〉 人形 交流 外交 青い目の人形 使節団

Modern Role of Dolls in Japan:

Focusing on international exchanges of dolls and doll diplomacy in 1920s -1940s

BEREZIKOVA Tatiana

Abstract

In the 1920s, when there were many factors that increased tensions between Japan and the United States, as a way to ease the tension, Sidney L. Gulick, an American missionary located in Japan from 1888 to 1913, initiated an exchange of dolls between children of the two countries. In 1927, American blue-eyed dolls were sent to Japan from American children and were well-received among ordinary Japanese people. As a response, Eiichi Shibusawa dispatched 58 friendship dolls from Japan to be placed at American museums the same year.

In the previous studies, the Japan-U.S. Friendship Doll Campaign of 1927 was considered the starting point of the international doll exchanges. However, international doll exchanges in Japan took place even before 1927.

This article aims to clarify the starting point and development of international doll exchanges in Japan and the progress in doll diplomacy during Taisho and early Showa periods. To achieve this goal, this article divides the history of international doll exchanges into four periods. The first period is until 1920, the second one is from 1920 to 1926, the third is the year of the Dolls Campaign in 1927, and the fourth is from 1928 to 1932. The period that followed, starting from "Japan - Manchuria Dolls of Goodwill Mission" in 1933, marked the turning point from doll exchanges to doll diplomacy in Japan.

This paper considers the phase from 1933 as a period when doll diplomacy took

shape in Japan, and provides an overview of the subsequent changes in the character of doll diplomacy up until World War II. In addition, at the end of World War II, attention is paid to the differences between pre-war and post-war periods, even though only a few examples of post-war doll missions can be traced.